

## Interview mit TN05 (10.07.2017)

Q : まず最初にお聞きしたいのは、ドイツ語の教師として教え始めた頃のことなんですけれども、ドイツ語を教えようと思うようになったのはどうしてでしたか？

A : 教え始めた頃ですよ？

Q : そうですね。ドイツ語を教えるきっかけとかモチベーションとか。

A : はい。えーなんというか、自分がドイツ語を勉強して、(中略)ドイツ語を通じて自分が経験したこととか、ドイツ語をやっている良かったと思うことがやっぱり多かったもので、やっぱりその経験を誰かに伝えたいし、そういうふうにドイツに行ってくれる人、ドイツ語圏に行ってくれる人に、あの役に立つ仕事をしたい、というふうに思っていました、ずっと。

Q : ああそうですか。で、教え始めて最初の頃の経験はどうでしたか？自分は教えることに関して、こう向いてるなあとか、なにか最初の頃の感じとしてはどうでしたか？

A : 教え始めて最初の感じ。あの、ちょっとわたしは、(中略)文法訳読法で教えてほしいというような形で、結構、文法と講読という感じだったんですが、なんかやっぱりこう、接続法まで教えてほしいというような、かなり詰まったカリキュラムの授業だったんですね。でそこで、文法訳読法を使いながら学生たちに教えていて、それは非常に手ごたえがあったんですけども、非常に、手ごたえがあるというのはどういうことかという、自分がドイツ語っていうものを教えて、学生たちがそれに対して自分が教えたことに対して興味を持ってきているという、そういった実感は当時から持っていました。興味を持ってくれる学生さんもそれなりにはいたんですけども、やはり、でもその時にはですね、なんていうか、今の時代なのでもっとその、今のドイツの時事的なこととか、あと教え方にも工夫が必要だっていうのはちょっとその時にはずっと感じていたんですね。

Q : その最初の頃は、どんなことがわりと自分としてはできたし、どんなことは難しいっていうふうにその頃感じてらっしゃいましたか？

A : はい。当時できたと思っていたことは、まあ学生さんに対して興味を持たせること。興味を持たせることについてはある程度成功したのではないかと、思っていました。ですが、(ちょっと聞こえますか、大丈夫ですか？)

Q : はい。難しかったこともありますか？

A : はい。難しかったことは、密なカリキュラムの中ですべてを教えようとすると非常に時間が足りなかったこと。やっぱりカリキュラムと自分が教えたいことの中になんかギャップがあって、自分でそこをどう折り合いをつけていくかというのが非常に難しかったところです。

Q : ああ、なるほど。

A : また、(ごめんなさい、)学生さんの方も、さっきモチベーションを持たせることには

ある程度成功したとは言ったんですが、やっぱり外国語を勉強して何の役に立つんだろうっていうような、そういった声も非常に多かったところだったので、ある一方では。ですから学生さんの層が二つに分かれたっていうところはありません。

Q：ああなるほど。当時、\*\*さんは研究活動もしていらっしゃったんですか？それとも、どういう状況でしたか？

A：はい。今お話をさせていただいたのは、どういう状況だったかと言いますと、実は当時は大学院生だったのです。で、博士課程に在籍しておりまして、当時は主に文学を研究している状態で、教授法のこと何もしらなかつたんです、本当に。で、教えながら、自分のやり方を探っていくという、ほんとに手探りで教え方を自分で探るとい感じ。ドイツ語教授法という授業もあったんですけども、ほとんど教授法のこと教わらずに、なんかこう語学のテキストを読んで終わってしまったという、そういう状況でした。

Q：ああ、語学のテキスト。

A：はい。

Q：ドイツ語学のテキスト？

A：はいそうです。

Q：じゃあドイツ語について学ぶという感じだったのですか？

A：そうです。

Q：なるほど。当時は自分は文学研究をやってらして、でドイツ語の教師として教えて、というこの両者の関係について何か感じるころはありましたか？

A：なんか文学研究をやっている身でドイツ語を教えるということに対してあまり矛盾は感じてはませんでした。というのは、ドイツ語研究であれ、文学研究であれ、入口はやはり第二外国語としてのドイツ語というものを通ってくるので。

Q：昔ね、みんなそうですもんね。(中略)きっかけは、独文学会の教員養成・研修講座に参加しようかなと思われたのはどういうことでしたか？

A：はい。もともとこの研修講座には興味があったんです。ですがその当時、(中略)授業をしたという経験を積んでから参加の方がよいのではないか、というアドバイスがありまして。ですから教え始めた頃に一回行ってみようという気持ちはあったんですけども、そういったアドバイスも受けたので、それでしばらくそこに参加せずに待っていたという形なんですね。

Q：ああそうなんですね

A：それで、(中略)わたし大学院を終わらして、(中略)また教える仕事をしたいと思ったんですけども、その前に自分が変わりたいと思った。それが直接のきっかけで(中略)参加したといった次第です。

Q：自分が変わりたいというのは、教師としてのという意味ですか？それともなにかもっと広い意味で？

- A：教師として、教師として変わりたいと思っていました。
- Q：そうなんですね。きっかけとか、そう思う何かがあったんでしょうか？
- A：はい。先ほどお話しした教え始めのエピソードですね。その時に、自分の教え方が、自分が教わった通りにしか教えられない、と思ったんです。
- Q：はあなるほど。それで、変わりたいと。
- A：そうです。自分が習っていないけれども、違う教え方を身につけたいと思ったのが、大きいきっかけです。
- Q：ああなるほど。で講座にどんなことを期待されましたか？その期待がどれくらい満たされたか、満たされなかったかというようなお話があれば具体的にお聞かせ願えますでしょうか？
- A：はい。講座については、期待以上のものを与えて頂いたと思っています。自分にとって大事だったのはやっぱり新しい考え方で、例えば授業の組み立て方、カリキュラムの考え方、用意もそうですが、授業をやっていると考えなければいけない、例えば学習者同士の関わりとか、先生にもレポートを見ていただきましたけど間違いにどう付き合っていくかとか、そういう考え方や自分が教えていく方向っていうものを大きく示してもらったと思っています。
- Q：ああなるほど。で、教え始めた最初の頃と、教師としての今は、その講座終わってからまただいぶ経ちますけど、あ、そうですね。\* \*さんの場合は講座終わってから、そのあとにゲーテの講座に参加された。
- A：はい。
- Q：そちらでの体験はどうでしたか？まずどうして参加しようと思ったかということや、実際なにを期待して、それがどうだったかということ、そちらについてもお聞かせ頂けますか？
- A：はい、そうですね。講座が二年間あって、新しい考え方はよくはわかったんですけども、なかなか実際に自分の授業を変えるっていうところまでいくのには、かなり変わっては来たんですけども、もう一歩足りないというか。物足りなさがあって、(中略)自分自身やり方が変わるっていうことに対しては時間がかかるんだと思うんですね。ですから、二年で講座が終わってしまうんですけども、その続きで継続してこういう作業を続けなければいけないっていう、逆に焦りがすごく強かったです。
- Q：ああそうですか。それでゲーテに行こうと思った？
- A：ちょうどそのタイミングも良かったんですね。
- (中略)
- Q：そちらではどうでしたか？期待されたことが満たされたりとか。
- A：はい。期待されていたことは本当に満たされる、そういう講座だったと思います。
- Q：何か具体例とかはありますか？
- A：はい。一番大きかったのは、授業参観と、あと自分で実際に授業をやってみるとい

理論と実践が、どちらもうまくかみあったプログラムだったということです。

Q：なるほど、逆に言うと JGG の方は理論の方が多かったとか、そこらへんなんか比較するとどうですか？

A：はい。そもそも教員養成講座の方については、最初の趣旨の説明の時に、例えば英語の先生と一緒に場所で話したりしてるときに、ドイツ語についての知識とか、前提としているものが違いすぎるので、はじめ、基本的な議論や、外国語を教えるとはどういうことか、ということ、きちんと同じ基盤を持ちましょうという趣旨説明があったと記憶しております。ですので、理論がしっかりしているというのは、その点では非常によいことだと思います。JGG の講座でも授業参観をしたり、最後に実験授業をしたりする機会があるので、それはとても、わたしの場合\*\*先生にも来て頂いたりしたので、非常に参考になるんですが、やはりある程度の実習というのは必要なのかなっていうふうには今から思うとそういうふうに思います。

Q：ある程度の自習？自分で勉強するという？

A：ええ、講座で勉強した、例えば **Unterrichtsplan** も書きますが、やっぱりそれを自分の授業で実践してみるとか。ただ単にプランを作るだけではなくて、それを自分が実際に授業でやってみるとか、そのプロセスを積んでいって初めて変わる部分が大きいのではないかという。

Q：ああ、「自習」じゃなくて「実習」が必要っておっしゃった？

A：はい。すみません。ちょっと聞きにくかったかと思います。

Q：いえいえ。はい、それで、教え始めた最初の頃と比べて、今のご自分の教師としての姿をどのように評価されますか？例えば昔より、こういうことはうまくできるようになったとか、こういうところはもっと伸ばしたいとか、何かありますか？

A：そうですね。教え始めた頃と比べると、自分の中の教え方のやり方は確実に広がったと思います。(中略) 教える機関に対してどういう方法がいいのか、そういう教え方を自分で選べるようになってきているというのは、教師としての進歩があったと、そういうふうな評価はしています。

Q：これからもっと伸ばしたいところとかはありますか？

A：はい。やっぱり学習者をどう、やっぱり自律学習というところに興味があるものから、自ら学習するという方法に仕向けていけるか、ということ。そこが足りない。ほんとにそこは足りません。

Q：そこをじゃあ例えば、そういうことができるようになるための、何かヒントになるようなものを、具体的に JGG の講座、あるいはゲーテの講座を受けて得られたりはしましたか？

A：はい。両方の講座でやはり自律学習ってということについては大きなテーマになっていますし、例えば自律学習もそうですし、たとえば **Lernportfolio** であったり、学習者に対してリフレクションを促すようないくつかの方法であったり、学習者を勉強に向か

わせる仕掛けっていうようなものは教えてもらってはいるんですが。

Q：なんか、どこかが今うまく実現できない感じがしますか？

A：そうですね。多分これは技術というよりも、学習者に対する向き合い方っていうところと関わりがあるんじゃないかなというふうに思います。あるところでは割とうまく行っているところもありますし、ただ、やっぱりそういうところが苦手というか、わたしがなかなかうまくできないところとかもあります。あの、クラスによって。反応が全く違うとかそういうことがあるので、むしろこれは技術的な問題だけではなくて、教員として学習者にどう向き合うか、学習者のニーズをうまくすくい上げられているか、そういう問題になってくるのかなと感じています。

Q：なるほど、ありがとうございます。最後に二つ質問なんですけど、ドイツ語教師としてのご自分やよい授業ということに関して、何か具体的なイメージとか、あるいは将来に向けてこうしていきたいということでもいいんですけども、ありましたら聞かせていただけますか？

A：ドイツ語教師としてのよい授業ということ。

Q：はい、ドイツ語教師としての自分の今後こうなっていきたいというようなビジョンとか、あるいはよいドイツ語授業っていうのを考えた時に、今後こういうふうに行きたいとか、そういったことはありますか？ちょっと抽象的なことすみません。あるいは別の言い方ですと、教師像っていうことに限ると、ドイツ語教師としての自分の未来像とか、あるいは自分にとっての理想の教師像っていうものはありますか？

A：ある意味で難しいことなんですけど、よいドイツ語の授業って何かを考えると、学習者が自分の目的、自分がこういうものを勉強したいっていうものがあって、それを支援していくのがよいドイツ語教師だと思うんです。昔はやっぱり一斉授業で、教員が一人でリーダーシップを発揮してぐいぐい引っ張っていったっていうそういう、初めはそういう感じだったんですね。ですが最近やはり教員が前に出るというよりも、学習者が自分で興味を持って勉強していける、そういう状態を作るのがいい授業なのではないかっていうふうに考えるようになりました。学習者が興味を持ってドイツ語を勉強し続けられるような、例えばこういう情報があるよとか、今こういうことがドイツで話題になっているんだよっていうような時事的なことも含めて、いろいろな学習者の興味を引き出せるような、そういう話題を提供したり、やっぱり支援者だと思うんです。ですので、理想というのはやはり学習者のニーズをできれば、できるだけすくって、そこに対してなんか導きであったり、一緒に進んでいって、学習者が歩いているちょっと先を一緒に拓いてあげられるような、そういうのが、わたしも非常に抽象的な言い方になって申し訳ないのですが、そういう授業がいいと思っていて、そういう学習者のちょっと先を見せていくっていうところが役割なのではないかな、と思います。

Q：こちらで用意した質問は以上ですが、それ以外に何か言っておきたいことはあります

か？

A：(中略) 今まだやっぱりカリキュラムとか非常勤講師としての立場ですと、(中略) 文法この教科書使ってこれ全部やってくださいとか、自由にやっていいとはいわれても暗に求められているものが違うんだらうとか、そういうところでは非常に現場が変わらないとなかなか難しいのかなと思うことは多々あります。ですので、理想としてわたしが目指したいものというのは持ってはいるんですが、(中略) カリキュラムに制限されているという、そういうところは感じるころではあります。

Q：で、そのカリキュラムっていうのが、非常勤講師の立場だとタッチできない部分であるということですね？

A：はい。

Q：なるほど。どうもありがとうございました。